

アフリカでの活動におけるネットワークの重要性

—ガーナ共和国での現地調査活動を通じて—

Importance of Human Network for Activities in Africa:

Case from Field Research in Ghana

一橋大学国際・公共政策大学院グローバル・ガバナンス研究科卒 **高木 勇歩**

TAKAGI Yuho

(Graduate, School of International and Public Policy, Hitotsubashi University)

キーワード：アフリカ、ガーナ

はじめに

私は2013年4月から2年間、一橋大学国際・公共政策大学院グローバル・ガバナンス研究科にて、アフリカ地域における天然資源と国家の発展に関する研究を行った。とりわけ、ガーナ共和国（以下ガーナ）における石油政策に焦点を当てて調査を進めていたが、その地域性と新規性ゆえ日本では先行研究や現場の声が十分に手に入らないという大きな課題に直面していた。打開策を模索する中で、国連大学サステナビリティ高等研究所（UNU-IAS）がアフリカを対象として行っているグローバル人材育成プログラム（Global Leadership Training Program in Africa, 以下GLTP）の存在を知り、2014年度の2期生として採用していただいた。これにより、同年10月からおよそ2ヶ月にわたりガーナにおいて現地調査を行うことができた¹。

この現地調査の収穫は、修士論文の核を固めることができたことばかりではない。なによりも強調すべきなのは、日本とは大きく異なるアフリカという環境において生活や活動上の困難を数多く経験でき、またそうした問題に見舞われたとき、それを解決する力を養成する大変良い機会となったとい

¹ 自身の GLTP レポート URL :

<http://i.unu.edu/media/ias.unu.edu-jp/news/7475/GLTP-2014-Final-Report-Mr.-Yuho-TAKAGI.pdf>

うことだ。本レポートにおいては、一部ではあるがそうした経験を共有させていただくことを通じて、同じような境遇にある学生の方にとっての検討の一助となれば幸いと考える。

インターンシッププログラムへの参加の経緯

GLTPは、国連大学が提携するアフリカの8大学のいずれかに日本の大学院生を派遣し、現地での研究活動を通してグローバルに活躍できる人材を育成するというものだ。採用方法は、希望する対象大学を自身で選び、その大学において活動したいと考える研究計画を任意で作成したうえで、書類審査（および必要に応じて面接）を行うというものであった。

私が調査対象としたガーナは昔から金の採掘が盛んな国であり、同資源と発展の相関性に関する研究はこれまでも多く行われてきていた。それに対して私の研究内容は、ガーナで2010年から採掘が開始されたばかりの「石油」に焦点を当てるものであり、必ずしも王道とは言えなかった。だが、同プログラムにおけるアプローチとして、「開発全般の課題を抱えたアフリカの発展に貢献する人材育成」という方針があり、研究分野や内容に制限が設けられていなかったため、自分の関心に対して妥協することなく調査を行うことができた。また、国連大学が持っているネットワークを存分に活用し、自分の研究テーマに即したガーナ大学の教授を指導官として紹介してくださった。日本側の視点からのみ同国の政策を捉えていた私にとって、現地の専門家の方から直接教を乞う機会は大変に貴重で、これにより一層現実の問題に即したテーマ設定をすることができたと感じている。

現地での活動内容

先ほども述べたように、現地での活動計画は全て自分で作成した。もちろん技術的なアドバイスなどは多くいただいたほか、現地においても指導官と定期的にミーティングを行い、方針の確認や修正を行っていただいたが、プログラムとして与えられたことをやるのではなく、タイムスケジュールから調査活動の内容にいたるまで自分で作り上げていく経験は、大変良い訓練となった。私の場合は、関係機関等へのインタビュー調査が活動の中心であったが、研究計画を逐一修正しつつ、かつ論文執筆を同時に行う必要があった。そこで基本的なスケジュールとして、まず以下の通りテンプレートを作成し、異なる生活環境でもリズムを崩さないように心がけた。

図1：基本スケジュール（月-土）

8:00-9:30	第1部：活動計画・1日の課題設定
9:30-12:00	第2部：文献研究・サマリー作成
12:00-13:00	昼食（現地学生との交流）
13:00-15:00	第3部：インターネット等を利用した資料収集
15:00-17:00	第4部：研究計画の再考および論文の草稿作成

※ インタビュー実施日については例外とした（訪問先の詳細は後述）。

そのうえで、滞在期間である2ヵ月間を2週間ごと4クールに分類し、おおまかに①導入とアポ取り、②インタビューの実施と結果の反映、③計画の修正、④遠隔地調査というスケジュールで活動を行った。インタビュー先としては、政府機関（財務省、エネルギー省等）、国会（議事録収集のため）、国際機関、国際NGO、日本大使館、民間企業、研究機関等約25名の方のご協力を賜った。



写真1：インタビュー先の市民団体の方と

写真2：ガーナ西部の都市タコラジ²にある技術者養成学校を訪問

直面した問題（アポとり）

活動における困難は少なくなかったが、特に苦労したのはアポとりだった。海外におけるインタビュー調査は初めてだったので、ガーナにおける行政機関及び市民団体の勝手が分からず、訪問を実現するまでにかなりの時間と労力を要した。例えば、大体の機関がHP上にメールアドレスと電話番号を持っているが、メールを送っても返信が来ることはほぼない。また、電話はつながるが、7割ほどの確率で「まずはメールを送ってほしい」と言われる。これに素直に従っていると永久に訪問が実現しないので、一応上記の手順を踏んだ上で、返信がなくても直接訪問してしまうことにしていた。そして、「メールも送ったが返信がなかったの」という説明とともに、その場でアポ取りを行うよう心がけた。財務省に至ってはアポが取れるまでに計3回訪問することとなった。

今となっては、このような事態を見越して、渡航開始と同時に一気にアポ取り回りをしてしまうべきであったと反省している。特に滞在初期は計画がかたまっていなかったことから聞き取り項目がまだ作成できておらず、アポ取りを後回しにしていたことで、回りきれなかった機関もある。また、これは当然のことながら、一番良いのは人づてに紹介していただくことであった。直接紹介いただけた場合には冷淡な対応をされることなく、非常にスムーズに聞き取りまで行うことができた。

² タコラジは、ガーナ最大の油田である Jubilee 油田を沖合に有するウェスタン州の州都。同都市に、欧米系企業が出資して技術者養成のためのトレーニングセンターを作り、現地雇用創出のための活動を行っている。

現地での生活 1（衣食住）

慣れない土地での活動には、なによりも生活環境の整備が肝要である。財政的事情やツテがないことにより滞在先が確保できず、現地調査を断念する人も少なくないと思像する。だが私の場合は、国連大学の持つネットワークを通じて、かつてUNDP(United Nations Development Programme)の職員をされていたMs. Adisa（私はMama Adisaと呼んでいた）のご厚意で、2ヵ月間のホームステイをさせていただくことができたのだ。家は首都郊外の穏やかな地域に位置しており、大学まではバスで20分、中心部まではバスで約40分という好立地だった（朝夕のラッシュにはまると同じ距離でも2時間以上かかったことは事実だが）。また、ただ部屋を提供していただいただけではない。3日に1回訪れる計画停電の夜には本を読むこともできないため、「話をしよう」と私をリビングに招き、ご本人の国際機関時代やガーナの歴史、ガーナ人の国民性などに関するお話を聞かせてくださった。国際的なフィールドで仕事をするということについて、一番実感を得ることができたのはこの時間であったように感じる。

さらに大きな助けとなったのは、家に滞在しているときにはMama Adisaの手作りガーナ料理を食べさせていただいたことだ。ガーナでは、トウモロコシやキャッサバを練って作る主食（フフやティゼット等）をシチューにつけて食べるのが日常的な食事で、初めは主食の独特な味に戸惑ったりもしたものの、1ヵ月もすると、現地のマナーに従って手で毎食おいしく頂いていた。また、ガーナでは「現地食を食べている」というだけでも現地の人に喜んでもらえて、それがコミュニケーションのきっかけとなることが多くあった。



写真3：滞在先の家



写真4：お世話になったMama Adisa と



写真5：Mama Adisa お手製のガーナ料理

現地での生活 2（在留邦人のサポート）

ガーナのビザには思わぬ罠があった。それを教えてくださったのは、民間在留邦人の方だった。渡航前にビザを取得する際には、在京ガーナ大使館で滞在期間3ヵ月分のビザをとっていた。だが、入国審査時に手書きで「30」と滞在許可日数が書かれると、ビザの効力は1ヵ月になってしまうというお話をお聞きした。このからくりには気付かず不法滞在の誹りを受け、出国時に罰金を科せられるケー

スが頻発していたらしく、私のパスポートにもまさに同様の数字が書いてあった。もしもこの方とお話する機会がなければと思うとぞっとする。これだけでなく、生活物資の入手先や土地勘など、あらゆる面においても在留邦人の方に助言をいただいた。特に、国連大学の一機関でありガーナ大学キャンパス内に事務所がある UNU-INRA (United Nations University, Institute for Natural Resources in Africa) の職員の方には、ことあるごとに助けていただいた。一度自宅に招いていただき、貴重な日本食をご馳走になったときには、こんなに美味しい日本食があるものかと感動した。こうしたつながりから日本大使館、日系関連企業の方へのインタビューも行わせていただくことができた。現地活動であれば現地の社会にどっぷりと浸かることが一番重要だが、同時に「現地にいる日本人（外国人）」だからこそ見えるその国の姿もあるということを学んだ。

おわりに（ガーナでの活動とキャリア）

現在私は、対アフリカ外交をはじめとする日本外交の発展に貢献することを目指し、外務省というフィールドで日々自分の未熟さを痛感しながら研鑽を積んでいる。ガーナに渡航する際には既に進路は決定していたが、初年度から自身が最も関心を持っていたアフリカを所掌する部署に配属していただき、またそこで実感を持って仕事に携わることができたのも、GLTP における活動経験があったからこそだと確信している。同時に、実務家だからこそ出来ることや持てる視点があることを感じつつ、学生の自由な立場だからこそその発想や行動力があったこともまた事実だと考える。そうした自由を存分に活用する機会を与えてくださった GLTP に感謝するとともに、より多くの学生がアフリカをはじめとする国際的フィールドへの留学を通じて貴重な経験を積んでいくことを願ってやまない。

* 本記事については、本マガジン『留学交流』2016年1月号にも下記の関連記事が掲載されていますので、ご参照ください。

【論考】

「アフリカにおけるグローバル人材育成事業」-国連大学による能力開発へのアプローチ
国連大学サステナビリティ高等研究所プログラム・アソシエイト 今井 夏子

http://www.jasso.go.jp/ryugaku/related/kouryu/2015/_icsFiles/afielddfile/2016/01/12/201601imainatsuko.pdf